

令和6年度保健消防委員会行政視察報告書

保健消防委員会委員長 田畑 直子

【視察日程】 令和6年11月18日(月)

【視察委員】

委員長 田畑 直子

副委員長 岳田 雄亮

委員 野島 友介、阿部 智、植草 毅、麻生 紀雄、
酒井 伸二、白鳥 誠、中村 公江

【視察地及び調査事項】

美浜保健福祉センター

・高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施の健康教育について

【視察報告】

1. 高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施の健康教育について

調査目的	千葉市は、高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施を推進するため、令和6年度までに全区の保健福祉センターに医療専門職を配置し、高齢者に対する支援として「通いの場等への積極的な関与等(ポピュレーションアプローチ)」の事業を実施し、フレイル予防の健康教育や健康相談等を行っている。 美浜保健福祉センター健康課において実施されている、シニアリーダー体操参加者を対象に行われる健康教室を視察し、実施状況や今後の課題等について調査を行う。
視察概要	1 調査項目 高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施の健康教育について 2 対応者 美浜保健福祉センター所長、 健康推進課長、同課課長補佐、同課主査 美浜保健福祉センター健康課長、同課主任保健師  【健康教室を見学】  【職員から説明を聴取】

	3 主な質疑応答(□:質疑、■:答弁) □介護予防の対象となる方は。 ■要支援状態に至る前の方が対象となる。 □厚生労働省からの指示により事業の実施が進められているのか。 ■法改正が令和元年にあり、令和6年度までに全ての市町村が、高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施事業を行うように求められている。 □任意事業になるのか。 ■実施については努力義務となっている。 □令和元年に改正された法律は何に該当するのか。 ■医療保険制度の適正かつ効率的な運営を図るための健康保険法等の一部を改正する法律が該当する。 □実施する区が増えても実施回数がそこまで増えていないのはなぜか。 ■当初はあんしんケアセンターや生活支援コーディネーターから紹介をいただいた場所などを中心に多数訪問し、中には年に複数回実施していた場所もあったが、回数を重ねるごとに訪問先や回数を精査している状況であり、実施する区が倍に増えても、実施回数が単純に比例しない状況となっている。 ■ポピュレーションアプローチに関しては、新規開拓が言われており、初年度で実施した場所には2年目は基本的に行かずに、違う場所で実施をして広めるという形をとっている。地域からは毎年実施してほしいという意見もあるが、限られた専門職で質の高い健康教育を広めていくという考えからこの実施回数となっている。 □今日のシニアリーダー体操の参加者は初めての方が多いのか、内容をアップデートしたりして複数回来られている方もいるのか。 ■今回のシニアリーダー体操は初めての内容になる。 □男性の参加者が少ないようだが、男性参加を促す取組をしているのか。 ■団体によっては男性が役員をやっていて一緒に参加をしてくれる場合もある。男女問わず参加いただけるようお声がけを行い、普段あまり家から出ないような方が外出するきっかけになるようにという思いで実施している。 □講座を開催する上での目標や事業計画があれば教えてほしい。
--	---

	■できるだけ広く普及していきたいという考えのもと、今年は年間で20件程度新しい場所での実施を予定している。いろいろな機関と連携して開催しており、市だけで独自に人を集めることはマンパワー的に難しい。関係者や地域の方のご協力を得ながらこの活動を広げていきたいと考えている。また、開催に当たっては、事前に必ず会場に行き、どのような対象者がいるのかをリサーチし、毎回対象者に合わせて講座の内容を変えている。対象者の好みや地域の特性から、参加者に喜んでもらえる講座を開催することを目指している。 □フレイル対象者に対する参加割合はどうやって把握しているのか。 ■全市での75歳以上の被保険者数は14万4,000人強、そのうち令和4年度から今年度8月末までの通算の参加者数は3,800人強となっており、全数からの参加割合は3%に満たない状況であるが、全数のうちどのくらいフレイル対象者がいるかは把握が難しい。こちらで把握できる対象者の概数としては、問診票の状態や特定健診のデータからフレイルが疑われる方を抽出すると、昨年度では8,300人強であった。そのような方に各区で個別にアプローチをかけて、対象者に合った相談・支援を行っているところである。 □この取組を拡大していくための課題や周知方法についてどう考えているか。 ■こちらから発信する情報に反応を示してくれる方は、ある程度ご自身の健康に関心がある方であり、そういった層へのアプローチは比較的容易である。逆に健康無関心層へのアプローチが課題であり、市政だよりやホームページでの広報はもちろんのこと、イベントでの周知や他課で実施している高齢者の健康に関する取組なども活用し、幅広く周知をしていく必要があると考えている。 □男性の参加者が少ないことに対してどのように考えているのか。 ■地域活動の中で、男性の役員が多いところなどは男性を誘いやすい傾向があり、男性が一人で女性の輪の中に入るのはハードルが高いという印象がある。男性は長らく勤めていた方も多く、組織の中でのやり取りが得意な方も多いと思う。そういったノウハウを地域の役員などで発揮していただくなどして、参加者を増やすような雰囲気作りを行ってもらうのが好ましいと感じている。 □講座内で配布している資料は誰が作成しているのか。 ■健康推進課で作成している。 □フレイルは男女でどのような傾向があり、アプローチにおいてどのような取組をしているか。
--	--

	■本市におけるフレイルの傾向としては、男女共に身体的フレイルの割合が高くなっている。また、身体的フレイルと低栄養で女性の割合が高くなっており、口腔フレイルの割合は男女同数であった。 ■健康診査の結果等から把握したフレイルの高齢者に対して、男女別のプログラムは実施していないが、高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施でのハイリスクアプローチでは、個々の健康課題に応じた個別支援を実施している。男女の特性に応じたアプローチの取組については、他の自治体の事例を研究していきたい。また、令和6年度よりフレイル状態の高齢者に対して、理学療法士などのリハビリ専門職が対象者宅に訪問し、状態の改善に向けた支援を行う「フレイル改善事業」をモデル的に実施している。 □ハイリスクの対象者はどのような傾向があり、どのような取組をしているか。 ■全体的に低栄養傾向の方が多く、対象者の食事内容や食欲に合わせて、足りていない食品群の助言や間食を促す等、摂取エネルギー量を増やせるよう保健指導をしている。また、口腔該当者には、歯科受診が必要な状況にも関わらず受診していない方もいるため、受診していただけるよう働きかけている。運動該当者は主観的健康観の低さも抽出条件に含まれており、精神面の支援が必要な方もいる。健康診査の結果のみではわからないことも多く、できるだけ対象者に面会し、健康状態等を把握するとともに、対象者に寄り添った支援を実施している。 ■健康状態不明者への支援では、健康状態に問題のない方がいる一方で、経済的問題や家族支援が必要な方、医療や介護が必要な状況であっても、病院受診を拒否される方など、様々な課題を抱えた方がおり、必要に応じて、あんしんケアセンターや福祉まるごとサポートセンター等と連携を図りながら支援を実施している。 □関係機関との連携のうち、社会福祉協議会や地区部会との連携状況は。 ■社会福祉協議会の各地区部会が実施する「ふれあい・いきいきサロン」については、情報提供を受け参加者の状況などを共有し、健康教育を実施している。また、あんしんケアセンター主催の地域ケア会議に出席し、個別事例を通じた地域課題の検討を行っている。地域ケア会議には社会福祉協議会が出席することもあり、情報や意見交換を行っている。 □口腔機能健診の受診実績はどうなっているか。 ■令和5年度まで健康課窓口で申請した方のみを対象としていたが、令和6年度より、特定健診、健康診査の結果から把握した、口腔機能低下が疑われる高齢
--	--

	者に口腔機能健診の案内と健診票を送付している。 □国保データヘルス計画との連携状況は。 ■本事業におけるハイリスクアプローチは、75歳以上の後期高齢者を対象としているため、特定健診やデータヘルス計画との直接的な連携はない。低栄養状態の高齢者に対する支援では、年齢による保険者の変更に影響を受けることなく、支援を実施できるよう、65歳から74歳までの前期高齢者への支援は国民健康保険事業として健康推進課で実施し、75歳以上の後期高齢者へは「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施」において支援を行っている。 ■千葉県後期高齢者広域連合が作成している「第3期高齢者保健事業実施計画（第3期データヘルス計画）」では「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施」においてフレイル予防、転倒骨折予防等の保健事業や健康状態不明者の把握、適切な支援を実施することとされており、本市でもその課題や目標を踏まえ取組を進めている。 □家庭訪問、電話による保健指導が業務として増えたことや今後対象者が増えることが予想される中で、保健師の人員体制に不足が生じないか。 ■現状各区4名で実施しているが、身体状況など問題が複数あったり、複雑な背景があったりする場合は、1回の指導では解決せずに複数回のアプローチが必要となってくる。そういった状況が増えると、現場での人員が不足してくることが考えられる。 □健康教室について継続性を持たせるために、シニアリーダーや市民が主体となってフレイル対策の講座を行う今後の展開はあるのか。 ■継続して実施してもらうことは必要であるが、具体的な事業展開はまだ決まっていない状況である。ただ、本事業は立ち上げて3年目の事業であり、今後どんどん広げていく必要があると思う。また、そのためには人員確保が大きなネックの1つになると感じている。担い手となる職員をどれだけ配置できるか、予算が用意出来ればすぐに人員を増やせるという問題ではないと思う。各区の状況や要望といった生の声を事業に反映できるようにしていきたい。
主な 委員所感	○女性の参加者が9割以上であり、男性参加者増加のための工夫が必要だと感じた。住民目線でわかりやすくフレイル予防の知識を学ぶ工夫があった。自分に必要な日常生活の改善は何かがわかるように講座を展開されていて、配布されている資料の内容もわかりやすく、見やすくよかった。 ○アウトリーチで団体に出向くことが素晴らしい。社会参加を促すため活動団体の見える化を進め、情報共有が必要と考える。

	○65 歳以上の歯科検診の受診率が気になった。今後対象団体の増加や指導する市民の増加状況によっては、職員の充実が必要となるのではないかと感じた。 ○社会参加しない方へのアプローチを考える必要があると感じた。健康教室を受けた後、フレイル予防の取組を自走で継続していく必要性を感じた。 ○やっていることは思ったより多く、しっかりしている。しかし、これをどれだけの人が知っているのか、介護外の人にも周知した方がいいと思う。 ○フレイル質問票や体力測定を行い、フレイルの個別支援を行っていた。フレイルの話をしている職員の説明がすごく分かりやすかった。フレイル予防の栄養、運動、社会参加は正にその通りであり、そのことを伝えていくのは重要である。握力は全身の筋肉量の基準に、奥歯は力が入る要因、歯がよければ転倒予防にもなるなどを、私自身も学んだ。 ○1年間で40ヵ所以上、約700人の方に健康教育を行っている。あんしんケアセンターとの連携は必須であり、共催の健康教育も行い、いろいろな機関と連携できるようにしている。今後も周知活動は重要であり、介護が必要な方や高齢者だけでなく若い世代への周知も必要であると考えた。男性の参加率をあげる工夫も課題であると感じた。 ○ポピュレーションアプローチとの説明であったが、対象者の捕捉方法が、行政が把握している関係者、関係機関からの紹介に限定されていることから、ポピュレーションアプローチではないと考える。ポピュレーションアプローチという名称を利用するのであれば、行政が把握できない層（後期高齢者14万人中、要支援・要介護4.5万人を差し引いた9.5万人）への開拓に挑戦してもらいたい。その際には、現在の人材は健康教育事業に専属させることが重要で、委託事業等に対応することが現実的と考える。 ○高齢者が健康状態やフレイル予防に関心を持つ機会とし、フレイル予防の重要性について浸透を図る取組であると感じた。健康教室は、参加すればその良さがわかと思うが、いかにして参加してもらうかがポイントかと思う。男性の参加を増やす努力が必要であると感じ、更なる拡大を期待する。 ○非常に良い取組で、より多くの方に健康教室の受講が広がることを期待したい。地域に根付いている各関係機関と連携することで、地域の特性に合わせた取組が可能になるほか、住民から見ると、通いの場の充実に直結しており、事業が広がるよう応援していきたい。良い事業なので、ターゲット、目標、事業計画なども整理されるとより良いと思った。 ○高齢者の介護予防の取組についてよくわかった。今後、ポピュレーションアプローチを80～90パーセント以上の市民が歩ける会場で行われることが大事だと思った。また、歯に関わるのが重要とのことを、もっと啓発する必要があると感じた。具体的に対象者の数と受講者の数をしっかりと把握し、多くの割合を目標値にする。
--	--

	る取組を、また、男性の参加者の高まりを目指す具体的な取組を、ほかの自治体等の取組を参考にして行っていただきたい。 ○フレイル予防について、看護師、歯科衛生士、管理栄養士の方がわかりやすく話をされて、自分たちの暮らしぶりを振り返る機会になったのではないかと思った。参加された方は、ほぼ女性で、体型的にも健康に問題がなさそうな感じの方が多くようにも感じた。 ○介護予防の必要性を理解して実践していくためには、時々進捗がどうなっているのか、評価しつつ、どう取り組んでいくのかも大事だと思う。 ○食事内容の理想はわかるが、現場は年金が減り、節約した生活をしている方もいるため、いろいろ工夫が必要かとも感じた。
--	--